名作落語全集

艶笑遊里篇　下巻

西澤道書舗

名作落語全集
<第二巻>

著者承認
検印省略

艶笑遊里篇<下巻>

昭和43年3月25日　印刷
昭和43年4月8日　発行　　¥ 290

編著者　今村信雄
発行者　西澤道夫
印刷者　松沢印刷KK

発行所
西澤道書舗
東京都千代田区神田神保町1—5

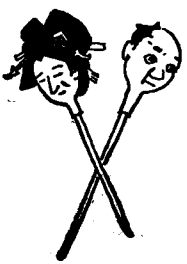
発売所
東京学生出版社

落丁・乱丁の際はお取替致します。

名作落語全集

艶笑遊里篇　下巻

今村信雄　編著



西澤道書舗

②艶笑遊里篇

もくじ

隠れ遊び　三笑亭可楽　7
三枚起請　三遊亭金馬　26
文違い　三遊亭小円朝　48
五人廻し　春風亭柳橋　69
縮み上がり　桂文治　86
お見立て　柳家小さん　106
首ッ丈け　橘家円蔵　126
なめる　橘家円蔵　145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

山崎屋〈上〉　桂文楽　178
——よかちょろ——
山崎屋〈下〉　桂文楽　202
風呂敷　三笑亭可楽　223
紙入　三遊亭円生　242
現代落語名鑑〈芸術協会〉　250
風流小話
○たらい廻し　25
○それはそれ　47

○息　継　68
○両　替　屋　85
○残りもの　177
○旦那様ぐらい　201
○鍛　練　222
○喜　寿　241

隠れ遊び

（三笑亭　可楽）

人間はいくつになりましても、色気というものは必ず去るものではない。息の通ってる間は、みな色気と欲気はついているものだと申します。お年を召して御子息に世をゆずり、楽隠居というので、お頭をまるめて、道行ぶりか十徳などを着て、うわべから見ると大層堅固に見えて、それで内々浮かれていらっしゃる方がずいぶんあります。うわべが堅くって心がやわらかい、日なたの食パンみたようなもので、

隠居「オヤ親方、どうしたえ」

親方「これはご隠居さん、どちらへ」

隠「今日はお天気もよし、家にばかりいても身体のためによくないから、ブラ〳〵運動に出かけたよ」

親「そうでございますか、そりゃア結構で」

隠「お前さん、どこへお出でだ」

親「ヘエ、きのう馬鹿に取り込みまして、今日は少し間日でございますから、ちょっと照降町の名古やまで買物に行って来ました」
隠「アアそうかえ。時に親方、お前にこないだ、たのんで置いた剃刀はどうしたえ」
親「エーちょうどいいのがありました。これならお素人にちょっと使えようと思いましたから、いま長谷川町へまわってスッカリ、ムラを抜かして来ました」
隠「ドレ、お見せ」
親「これでございます」
隠「なるほど、これはたいそう工合がよさそうだ。なるほど……」
親「どうもご隠居さん、往来へ立って、髷を剃ってちゃアいけません」
隠「ちょっと切れ味を見なければ分からんからね。……なるほどこれは使い好い、幾らだったえ」
親「ヘエ、こないだお預かりをしたんで、お釣りになります」
隠「そうかえ、それは安かった。ナニ釣りはいらない。イヤ大きに世話さま。どうも店へ行って親方に頭を剃ってもらう間にも、私は若い時分から、一日おきぐらいに、この髷をザッと家で撫でておかないと、誠に気色の悪い性分で……」
親「だからお綺麗ですなア。ご隠居さんはお年を召しても、いつもお綺麗だって、みんな噂をい

たします」

隠「イヤ、ナニ年をとると綺麗にしても自然に爺くさくなるものだから、私などもなるたけ綺麗にしているのさ」

親「ごもっともでございます。ついてはご隠居さん、往来中で妙なお話をするようですが、あなた何ですな、チョイ〳〵吉原へお繰り込みだそうで……。ナニ隠してもいけません。種が上がっています」

隠「オヤ〳〵誰がそんなことを言いました」

親「店へ来るお客で、こないだ遊びに行くと、京町のところでご隠居さんをお見掛け申したそうで、京町の電気が柱の上で光ってるのに、柱の下でもピカ〳〵光ってるなア、変だと思ってよく見たらご隠居さんの頭だったって……」

隠「冗談じゃアない。お前のところは人出入りも多いし、若い者がチョイ〳〵行くんで、そんなことをいうんだろうが、マア親方、お前だから話をするがね。人間というものに、金を貯めるのは結構だ。結構だけれども、無理に貯めてもいけないのだ。かせぐだけかせいで、使うだけ使って、それで残ったのでなければ、ほんとうの残ったのではない」

親「ごもっともでございます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

隠「私などは若い時分にはずいぶんこれで道楽もし、いろ〳〵なことをして、それでもマア幾らか金が出来た。ところが、私には似ず、伜は馬鹿に堅造で、一生懸命に稼いでくれる。婆さんには早く死なれてしまって、その後、妾でもおけばいいようなものだが、そんなことは伜や嫁の手前もあるからして、実はソノ妾手掛けなんぞ置かずに、たま〳〵お前、吉原へチョイ〳〵繰り込んで、浩然の気を養うというようなことでな」

親「結構でございますな。あなたはお気がお若いから、やっぱりお頭にしても、綺麗になさるようなもので、私なども、ずいぶん若い時には、馬鹿をして、手間をとってる時分、親方のところへ付馬を引いて行ったりなにかして、いろ〳〵なことをやりましたが今じゃア、マアあんな店でも一軒もって、親方とか何とか言われてれば、職人の手前もあり、弟子の前もあるもんですから、まさか馬鹿も出来ませんで堅くしちゃアいますが、しかしご隠居さんの前ですが、世の中に遊興ぐれえ面白いものはございませんね」

隠「じゃアやはり親方も嫌いじゃアないかい」

親「大好きでげすが、そういうわけで、このごろは拠ろなく堅くなって、吉原の方へも余り行きません。どうでげす。いい折柄だがご隠居さん、今夜どうせ運動にお出掛けなさりゃア、真面目にお宅へお帰りじゃアありますまい。吉原へいらっしゃるなら、お供をしようじゃアありませんか」

隠「そうさな、行ってもいいな。だが親方、店の都合はいいかえ」
親「エー、今日はひまでございますから、ぜひ一つお連れなすって」
隠「じゃア出掛けようか」

のんきな隠居さんもあるもので、往来中で髪床の親方と相談が出来て、どこかで汐待ちに一杯やろうと、公園あたりをブラ〳〵しながら、ちょっとした小料理屋へ入って飲んでいるうちに、早やたそがれ、
隠「アアいい心持ちになった。親方どうだえ」
親「エー私も馬鹿にいい心持ちになっちまいました。いろ〳〵ご馳走さま」
隠「さっきから見るところ、お前はあまり酒の質がよくないようだな」
親「ナニ、私の酒は猫みたような酒で……」
隠「そうでない、顔に出ないで、だん〳〵青くなって、眼がすわるところを見ると、あまりいい酒とは思われない」
親「ナニ、そんなことはありません。アア馬鹿にいい心持ち

になった。これから先、モウ少し飲めば、ただ人のいうことが癪にさわるだけで、傍にあるものを叩きつけて、ちょっとマア暴れるくらいなんで」

隠「それがよくない。そんな馬鹿な真似をされては困るよ。私も隠れてマアたまに浩然の気を養うために遊びに行くんだから、もしそうでもない、向こうへ行って、お前、女郎屋で間違いでもあっちゃア困るから」

親「大丈夫でございます。そんなことはご隠居さん、ご心配なさらねえでも決して間違えなざアしませんから」

隠「なるたけマア隠やかにやってくれないじゃア困る。遊びに行ってもゴタ〳〵、するようなことでは何にもならないから」

親「よろしうございます。時に何でげすか、お馴染みがありますか」

隠「私は馴染みはない」

親「だってチョイ〳〵お出でなすって、馴染みのないというのはおかしうげすね」

隠「それがさ、年をとって馴染んで行けば、余計に銭もいれば、たまには無心の一つもいわれるというものだから、なるたけ初会か再会ぐらいにして、あれだけある女郎屋だから、どこへでもチョイ〳〵見世をかえて遊びに行く方が面白い」

親「ヘエーなるほど、やはりあなたはお商人ですねえ。ちょっと遊びをすればといって、そろばんをとって掛かるんだから……。もっとも年をとって行けば幾らか嫌がられ賃を出さなけりゃア、むこうでいい心持ちに遊ばしてくれませんからね。勘定高くって助兵衛なんだから、手がつけられねえ……」

隠「オイ〳〵親方、いやなことをいうね。ソロ〳〵始めたぜ」

親「大丈夫、こんな冗談の一つぐれえ言わなくっちゃア酒もうまくねえから」

隠「マア〳〵何でもいいから行こう」

二人ながら風に吹かれて、いいこゝろもちになって吉原へ繰り込みました。

隠「親方、どこにしような」

親「どこでもようございます」

隠「どこでもいいッたって、なるたけよさそうなところへ……」

親「どうですえ、このごろの見世の体裁は。嫌だ〳〵、クサ〳〵してしまう。何がってご覧なさいな。金ピカで彫りがしてある。まるで仏壇みたようで、お寺様へ行ったような気がする。ここへあがろうじゃアありませんか。見世がお寺様みたようで、坊さんが遊ぶんだから、まんざら因縁のねえこともなかろう」

隠「つまらないことをいいなさんな」
若者「いらっしゃいまし。エーお手軽さまに如何様で……」
親「オー、お手軽様でもお手重様でも、そんなこたア構わねえ。お前ンとこにはオツな女がいるな」
若「ヘエ玉揃いでございます」
親「賞めりゃア図に乗って玉揃いだってやがる。玉だっていい玉ばかりじゃアあるめえ。中にはヒビのいったのもあるだろう」
若「ご冗談さまで、とにかくお登りを願います」
親「オーご隠居さん」
隠「何だ」
親「こう並んでるなかで、どの代物がようがすね」
隠「そうさな、俺の見たところじゃア上を張ってるのが一番いいな」
親「ヘエー、私も実はあれに目をつけたんで……」
隠「二人で一人の女に目をつけても仕様がない」
親「じゃアこうしましょう。私はアー次ので我慢しましょう。若い衆さん」

若「ヘェ」
親「アー上を張ってる花魁は何というんだ」
若「エー上の花魁は籬さんとおっしゃいます」
親「いよ〳〵お寺だ。何ぼ客が坊主だって、籬さんとはうめえ名をつけたもんだ。その次は」
若「お次は溝萩さんとおっしゃいます」
親「いやだぜ、冗談じゃアねえ、盆みたようだな、お前ンとこは。向こうが籬、その次が溝萩、こっちは蓮の飯さんだろう」
若「恐れ入ります。どうぞおあがりを……。有難うございます。ヘェおあがりだよ」
トン〳〵〳〵、広い梯子段をあがって引付けへ通るまでが身上だそうで、こっちへというので引付けの座敷へ入る。籬に溝萩の二人がドッタン、バッタン〳〵〳〵あがってくる。幸いお座敷もあいてるので、初会からポンと籬の座敷へ入る。
親「食い物をドン〳〵持って来ねえ」
と、いろ〳〵な物を取り寄せて、行き渡るものは行き渡ってしまい、ちょっと器用の遊びをしているうちに、あまり酒のよくない人でございますから、下地のあるところへ、また注ぎこんで十分に酔ったからたまらない。向こうで女郎が耳こすりなぞをする奴を見ると、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong